新島講座についての報告

新島講座は、創立百周年記念事業として、新島襄を記念して一九七九年から開設された事業の一つで、立学の精神を基盤として現代にふさわしい教育、研究の幅広い交流を図り、わが国の学術・文化の進展に寄与することを目的としております。

新島講座には、内外の碩学を講師として京都・同志社に招聘して開催しているものと、同志社から講師を派遣して東京に開催の場を設けているものとの二つがあります。

昨年十月十三日(火)、十六日(金)の二回にわたり、京都・同志社今出川校地にて開催しました第十六回新島講座の講演要旨を記述いたしました。

第十六回新島講座

講師　アンドレアス・シュピーラ博士
　　マインツ大学教授

第一回講演会
演題　古代ギリシヤ詩に見る愛・情念・理性
日時　十月十三日(火)十三時十五分～十四時四十五分
会場　同志社大学神学館チャペル

第二回講演会
演題　古代ギリシヤ哲学における合理生と非合理性
日時　十月十六日(金)十三時十五分～十四時四十五分
会場　同志社大学神学館チャペル

アンドレアス・シュピーラ博士は、一九二九年にかのドイツ哲学者イマヌエル・カントの生地ケーニヒスベルグに生まれた。フライブルク、ミュンスター、フランクフルトの各大学にて西洋古典学、哲学及び神学を修めた後、一九五七年、フランクフルト大学で博士号の学位を取得。一九六七年、マインツ大学にて教授資格(西洋古典学)を取得後、同大学西洋古典学科助手、助教授を経て、一九七五年に正教授に就任、現在に至る。

シュピーラ博士は、博士号取得後直ちにW・イエーガー主監の『ニュッサのグレゴリウス著作集』の編集に参画し、以来、同教父研究の第一人者として知られ、現在、『国際グレゴリウス学会』会長の任に当たっている。ほかにも数多くの国際学会に所属しており、ニュッサのグレゴリウスに関してばかりでなく、古代ギリシヤ全般、例えば、ギリシヤ悲劇やギリシヤ哲学に関しても多数の著作がある。　本講演の課題は、ギリシヤ人最初の二人の詩人、ホメロスとヘシオドスを主たる導きの糸として古代ギリシヤ詩に特有のモティーフ即ち、愛・情念・理性の本質及び相互関係を解明する点にある。

ホメロスが叙事詩『イリアス』のなかで示しているように、ギリシャ人の眼から見て愛の本質を規定するものは「エロースの美による悟性への影響」であった。このエロースの美による悟性の混乱という普遍的現象は、ギリシャ人の眼には極めて魅惑的なものとして映った。例えば、ヘシオドスは、この普遍的現象に基づいて、一種の「神学」と言って然るべきものを作り上げたほどである。

ヘシオドスが叙事詩『神統記』において語っているように、エロースは世界創造に際してカオスとガイアと並んで第三の根源的力であった。エロースは、かつて未だ形を与えられていなかった質料に生命及び形を与えた生み出す原理、そして世界が硬直化し死滅することのないように今も世界を生かし続ける原理である。と同時にエロースは、人間及び神々において悟性を征服し、一切の理性の規則を洗い流してしまう奔流として働く原理でもある。これがエロースの美の両面性である。こうしたエロースの美の持つ両面性をホメロス及びヘシオドスばかりでなくその後のギリシャの叙情詩人や悲劇詩人たちもまた繰り返し自らの作品の内に描き続けた。

愛における悟性の運命、つまり愛に陥った人間がエロースの美の持つ力に抗し切れずに結局没落していく悲劇はギリシャ人を魅了し続けた。しかし何故ギリシャ人は、理性を打ち負かす情念の破壊的力をかくも執拗に描き続けるのだろうか。

それは《警告及び用心の促しとして》である。つまりギリシャ人は、人間を非合理的なものの無力な犠牲としてではなく、この非合理的なものを理性の力によって克服しうるものとして見ていたのである。そしてそれをギリシャ人は彼らの神話の一人の英雄オデュッセウスから学んだ。オデュッセウスは、エロースの愛及び情念の力に屈することなく、自らの悟性及び理性を正しく使用することによって幾多の危険に満ちた冒険をも乗り越えていくからである。ギリシャ人は、エロースの愛をめぐる情念と理性の困難な戦いを、人間が幸福を手にするために乗り越えていかねばならない課題と見なしているのである。

われわれ現代人は一般に、「合理的」―「非合理的」という対立図式で物事を考えることに慣れている。ところが、今日既に、この図式そのものの破綻が意識され始めている。このことを、新たな視野から問題視し、ひとつの問題提起を試みることが、本講演の主旨であった。新たな視野と言ったが、それは新奇なものではなく、西洋古典学の博識を駆使して、古代ギリシャ以来の伝統に基づいて開かれたものである。

われわれになじみの深い「合理的」―「非合理的」という対立図式は、近代におけるデカルト以来の合理主義に由来している。近代合理主義は、意識を悟性の働きのみに限定し、その範囲内に「合理性」の成立根拠を求めた。悟性の働きを境にして、「合理性」と「非合理性」を鋭く対立させたのである。そのためにまた、近代精神史においては、合理主義に並行して、非合理主義も生じてきた。しかし、「合理性」と「非合理性」の対立は自明なものとして本来存在するのであろうか。

古代ギリシャ哲学においては、「合理性」と「非合理性」との対立は存在せず、合理性の度合いの多い少ないということがある

だけであった。魂の悟性の働き以外にも、「識別」（krine-in）という働き故に、合理性を認めるのである。つまり、「合理性」ということが、人間の魂の活動全般に認められているのである。

シュピーラー教授の講演の眼目は、近代哲学が結果的に狭めてしまった「合理性」という地平を西洋の古い伝統に立ち返ることによって、それ本来の広い視野の中に収めようというところにあったように思われる。それは、ソクラテス、プラトン、特にアリストテレスにおける「合理性」という地平の再検討を通じてなされた。その再検討は、静かだが、厳しい近代批判を内包するものであった。

新島襄遺墨影本の掛軸を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に接する機会は少なく、せめて複製された掛軸でも欲しいとのご要望に応えて、影本を、三点作成頒布しています。

この影本は、新島襄が元治元年、函館からの脱国に成功した後、航海日記に書きとめられた漢詩および明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎掛　軸（影本）

一軸　八、五〇〇円

（H）「男児決志馳千里　自嘗苦辛豈思家」
却笑春風吹雨夜　枕頭尚夢故園花」
慶応元年三月ワイルド・ローヴァー号船上で作られた詩を明治一六年正月改めて浄書された。

（I）「不止月下併能越　跋渉八州是我分
壮図却促男児涙　滴々灑為縷々文」
明治二二年一二月新潟伝道に従事していた卒業生広津友信におくられた詩。

（J）「いしかねも透れかしとて一筋に
射る矢にこむる大丈夫の意地」
明治二三年一月五日「送歳の詩」と同様大磯百足屋で詠まれた和歌。

◎　購入ご希望の方は左記へ直接電話または文書でお申し込みください。

◎　代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

◎　製作日数の関係で、納品が一カ月程度遅れる場合があります。

取扱い・同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入
電話（〇七五）二五一―三〇三七・八